

# 文学に表れた平泉文化の基礎的研究（その1）

—「ころもかは」詠出和歌について—

相原 康 二※

## 一 研究の目的

源義経の最期については、『吾妻鏡』文治五年（1189）閏四月卅日条が最も基礎的史料である。即ち、「卅日己未。今日。於陸奥國。泰衡襲源豫州。是且任勅定。且二品仰也。与州在民部少輔基成朝臣衣河館。泰衡從兵數百騎。馳至其所合戰。与州家人等雖相防。悉以敗績。豫州入持佛堂。先害妻廿二歳。子女子四歳。次自殺云々（後略）。」（『新訂増補國史大系 吾妻鏡第一』より）というものである。

その五百年後の祥月に当たる元禄二年（1689）五月十三日に平泉を訪れた松尾芭蕉は『おくのほそ道』に次のように記している。（『前略』）先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣河は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。泰衡等が舊跡は、衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偕も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな

曾良（後略）

（『芭蕉 おくのほそ道』岩波文庫より）

500年の時間の流れの中で、義経の最期の場所が衣河館（旧衣川村）から高館（平泉町）に変わっており、その変化の背景に、芸能脚本を含む広義の文学作品の影響があったことは既に指摘されてきた。

文学の影響は平泉遺跡群の遺跡名にも及んでいよう。例えば、既述した高館は幸若舞などによる可能性が強い（ここは奥州藤原氏歴代の政庁「平泉館」跡に擬定されている柳之御所遺跡（国史跡）とセットをなすとみなされている最重要の遺跡である）。

また、衣川北岸に確認された摂待館遺跡の「摂待」は、奥浄瑠璃等の影響によるものと思われる。（12世紀の巨大な堀と土塁で防御されたこの遺跡の具体的な性格は未詳であるが、大量の「かわらけ」を出土していることから、儀式空間であったことは確実である）。

このようなことから、今後の平泉文化の研究のテーマの一つに、広義の文学作品（和歌・物語・説話・随筆・日記・謡曲・浄瑠璃・舞・紀行文等々で、概ね江戸時代まで）に描出された平泉文化の編年的な跡付けを加えるべきと考えたものである。

なお、検討すべき対象に、当然ながら、衣川流域などの平泉隣接地、奥州藤原氏のみならずその先駆的存在の安倍氏・清原氏もを加えることとした。

平泉文化に触れた文学作品の網羅的収集とそのデータベース化の必要性は、2008年（平成20）6月に故工藤雅樹先生より指摘されていたところであったが、今回の和歌を端緒としてその集成を行うこととした。改めて先生の学恩に感謝する。

## 二 和歌についての若干の要約

以下に詠出和歌の一覧を示すが、予め、その要約を示しておく。

まず、衣川・衣関・衣里などを詠んだ和歌を約80首確認できた。

衣に関わる地名は、歌枕として、10世紀半ばには都人に広く知られており、『能因歌枕』の成立（11世紀前半か）によつて、それが決定的となったものである。基本的には、遠隔の地にある歌枕の地名として、イメージ的に用いられている例が多い。

和歌の文学的な解釈は本稿の目的ではないが、「衣」から様々な連想が生じ、それぞれの思いが詠われたことは確実である。

例えば、「衣」から墨染衣や袈裟など宗教的な衣が連想され、「衣」の袖・袂から涙・川が連想され、「衣」を恋しい女性の柔肌を隔つものが連想される、といったように。

又、「関」から、涙・老・恋を邪魔するもの等、何かを止める関が連想され、さらに「衣」を彩る鮮やかな色彩・景物として桜や紅葉なども詠われていた。

約80首に達する歌の中で、衣川の現地を訪れて詠った実景歌とも言うべきものは極めて少ないと思われる。『能因歌枕』に挙げられた670余ヶ所の歌枕の42ヶ所が存在し、歌枕所在数第3位を占める陸奥国であるが、

都人からは文字通りの僻遠の地・現地には立てない憧れの地、イメージの地であった。

衣川現地に立った数少ない人物の一人はいうまでもなく西行法師（1118～1190）である。西行は二度平泉を訪れており、初度は康治二年（1143）か天養元年（1144）頃、再度は文治二年（1186）と言われ、隆盛期から全盛期の平泉を実見している文字通り稀有の人物である。

その初度の訪問の際と思われる28「とりわきて心もしみてさえぞわたる衣河みにきたるけふしも」の歌の詞書「かはのきしにつきて、衣河の城しまはしたる、ことがらやうかはりてものをみるこちしけり」との記述は、衣川河畔に居館的な建物が存在したことを示唆する可能性はないか。

また、一覧の中には含めなかったが、再度の訪問のことと推定される「陸奥國の平泉に向ひて、たわしね山と申す山の侍るに、異木は少き様に櫻の限り見えて、花の咲きたるを見て詠める 聞きもせず束稲山の櫻花 吉野のほかにかかるべしとは」も実景を詠んだ歌であろう。

さらに、別に、京東山の雙林寺で松近河を詠んだ「衣河汀によりて立つなみは きのまつがねあらふなりけり」も実景を基にした可能性がある。

西行法師以外で陸奥国に下向したことが確実な人物には藤原実方（生没年不詳、長徳元年（995）陸奥守として下向）と源重之（長保三年（1001）頃没）等がいる。

うち重之の58の和歌「昔みしせきもりみればおいにけり 年のゆくをばえやはとどめぬ」が実景を詠んだものとすれば、関の実在を示すものとなる。衣関には、安倍氏時代と奥州藤原氏時代のものがあるとのこれまでの推定に関わってくる。しかし、今暫くは「年のゆくのをとどめる関」との文学的解釈に従っておきたい。

以上、多くの詠出和歌の中で、若干でも歴史的資料となり得るのは西行法師の歌のみということになる。

### 三 参考文献

和歌の検索は以下の文献によった。

- ① 『日本古典文学大系索引』 2冊 岩波古典文学大系別巻第1・第2  
1963・1969 岩波書店刊
  - ② 『校註国歌大系』 歌集23巻・総合索引5巻他 1976 講談社刊
  - ③ 『新編国歌大観』 歌集編・索引編各10巻 1983 角川書店刊
  - ④ 『典拠検索新名歌辞典』 2007 明治書院刊
- 以下に「ころもかは」詠出和歌一覧を示す。

所 載 歌 集 等

註

I 『後撰和歌集』 卷十六 雜二一

題しらず よみ人しらず

1 ただちともたのまざらん身にちかき  
衣の関もありといふなり

II 『元真集』

はらへしたる女を見て

2 おとにのみききわたりつるころもがは  
たもとにかかるころなりけり

III 『古今和歌六帖』 第三 かは

つらゆき

3 身にちかきなをぞたのみしみちのくの  
ころもの川とみてやわたらん

IV 『能宣集』 四卷

また女のははのくだるに、みなれたま  
へる人のたばむとてめすに

4 みなれにしひとをわかれしころもがは  
へだててこひむほどのはるけさ

V 『実方集』

くにへくだるとて、まかり申しに女院  
まありたるに、ものかづくままに、侍  
従の典侍

5 みちのくにもせきはたちぬれど  
といひもはてぬに

I 『後撰(ごせん)和歌集』—村上(むらかみ) 天皇(在位946～947) による第二代の勅撰集、天曆(てんりやく) 末年(957) 頃成立、撰者は大中臣能宣(おおなかとみのよしのぶ)・清原元輔(きよはらもとすけ)・源順(みなもと)のした(ごう) ほか

II 『元真集(もとぎねしゅう)』—藤原元真(ふじわらのもとぎね) の家集、天徳(てんとく) 四年(960) 頃成立、元真是生没年不詳、三十六歌仙の一人

III 『古今和歌六帖(こきんわか・ろくじょう)』—『万葉集』から『後撰集』頃までの歌4500余首からなる類題和歌集、天延(てんえん) 年間(974) 頃成立。

\*紀貫之(きのつらゆき) —天慶(てんぎょう) 九年没、三十六歌仙の一人、『古今集』の撰者、『土佐日記』の著者

IV 『能宣集(よしのぶしゅう)』—大中臣能宣(おおなかとみのよしのぶ) の家集、正暦(しょうりやく) 元年(991) 頃成立、能宣は正暦二年(991) 没、三十六歌仙の一人、『後撰集』の撰者の一人

V 『実方集(さねかたしゅう)』—『実方朝臣集(さねかたあそんしゅう)』とも、藤原実方(ふじわらのさねかた) の家集、長徳(ちやうとく) 四年(998) 頃成立

\*藤原実方—生没年不詳、正四位下、左近衛中将になったが、長徳元年(995) 陸奥守となり下向し、任地で没した、「中古三十六歌仙」の一人

\*典侍(ないしのすけ) —内侍司(ないしのつかさ) の次官、実質的には長官、「すけ」とも

またあふさはたのもしきかな

おほんかへし

6 なにかはきみにむつれてとしをへば

ころものせきをおもひたえまし

7 わかるともころものせきのなかりせば

そでぬれまじやみやこながらも

VI 『拾遺和歌集』 卷十二 恋二

題しらず よみ人しらず

8 たもとよりおつる涙はみちのくの

衣河とぞいふばかりける

VII 『定頼集』

いそぎてきぬを人にぬはせければ、

御せあはせぬと人人のいひければ

9 衣河とほきあたりにあらねども

たれにあふせをわきていふらむ

VIII 『康資王母集』

うまごにくしたりし人のみちのくに

になりてくだるべしと聞いて

10 つらけれどうらなくおつる涙かな

衣の関もとどめがたくて

IX 『為仲集』

みちのくにの守になりてくだらんと

し侍りしに、式部大輔実綱が七条の

いづみにて、わかれをしみ侍りしに

VI 『拾遺（しゅうい）和歌集』—花山（かざん）天皇（在位984～986）の親撰とされる第三代の勅撰集、寛弘（か

んこう）三年（1006）頃成立、1350余首、20卷

VII 『定頼集（さだよりしゅう）』—『四条中納言集（しじょう・ちゅうなごんしゅう）』『権中納言定頼卿集（ごんの

ちゅうなごん・さだよりきょう・しゅう）』とも呼ばれる家集、寛徳（かんとく）二年（1045）以前に成立

\*藤原定頼—長徳元年（995）生れ、寛徳二年没、『古今三十六歌仙』の一人

VIII 『康資王母集（やすすけおつのはしゅう）』—伯母集（はくぼしゅう）とも、康資王の母の家集、12世紀初期の

成立か？

\*康資王母—生没年不詳、女流歌人、後冷泉（ごれいぜい）天皇（在位1045～68）皇后寛子に出仕し『四

条宮筑前（しじょうのみや・ちくぜん）』と称した、康資王を生む

IX 『為仲集（ためなかしゅう）』—『橘為仲朝臣集（たちばなのためなか・あそんしゅう）』とも、為仲の家集、11

世紀後半の成立か？

\*橘為仲—生年不詳、応徳（おうとく）二年（1085）没、陸奥守を経て、大皇太后宮亮（たいこうたいこう

ぐうのすけ）、正四位下となる、後冷泉期の受領歌人の一人

11 すぎきたる心は人もわすれじな

衣のせきを立かへるまで

同二日、たかしまといふ所に、三

かはのかみ季綱、たびのさうぞく

をつかはしたるに、そへたる

12 さして行く衣のせきのはるけさは

立かへるべきほどぞしられぬ

紀伊入道素意が衣川の歌のかへし、

たよりにつけてつかはす

13 なにせんにたちみ待つらむ思ひ出ば

衣のせきをきてもみよかし

X 『堀河百首』 題 雑廿首

関 顕仲

14 しら雲のよそに聞きしを道のくの

衣の関をきてぞこえぬる

X I 『永久百首』 題 夏十二首

夏衣 兼昌

15 夏たつとしるしも見えず衣川

いつも舟よるうらしなければ

夏衣 常陸

16 身にちかくなるとはすれど衣川

ひとへにのみはえこそたのまね

\*式部大輔（しきぶだいぶ）実綱（さねつな）——藤原実綱（ふじわらのさねつな）、1013～82？

\*三河守季綱（すえつな）——藤原季綱？ 天喜（てんぎ）四年（1056）の殿上詩合に参加

\*紀伊入道素意（そい）——俗名藤原重経（しげつね、成経）、1094年没

X 『堀河百首（ほりかわ・ひやくしゅ）』——『堀河院御時百首和歌（ほりかわいん・おんとき・ひやくしゅわか）』

とも長治（ちようじ）年間（1106）頃成立、源俊頼（みなもとのとしより、1055～1129）・藤原公実（ふじわらのきんざね、1053～1107）・堀河天皇等による最初の多人数百首、組題百首

\*源顕仲（みなもとのあきなか）——康平元年（1058）生れ、保延（ほうえん）四年（1138）没、従三位（じゅさんみ）左京大夫（さきょう・だいぶ）兼神祇伯（じんぎはく）となる、「永久百首」の作者の一人

X I 『永久百首（えいきゅう・ひやくしゅ）』——『永久四年百首和歌（えいきゅう・よねん・ひやくしゅわか）』とも、

藤原仲実の企画・勧進で永久四年（1116）成立、作者は源顕仲・藤原仲実、源俊頼、源忠房、源兼昌、女房常陸、女房大進

\*源兼昌（みなもとのかねまさ）、生没年不詳、従五位下皇后宮少進、『永久百首』作者の一人。この歌は『拾遺和歌集』にある。

\*常陸——肥後守藤原定成の女、本名肥後。藤原実宗（さねむね、1145～1214）の妻。永久百首の作者の一人

X II 『金葉和歌集』 卷第一 春部

春従東來といへることをよめる

覺雅法師

17 みちのくの衣の関をけさたちて

いつのまにかは春のきつらむ

X III 『散木奇歌集』 第七 恋部上

人のもとにまかりたりけるに、こよい  
はかへりねと申しければいひつかはし  
ける

18 かずならぬわが身はよるのころもかは

きつれば人のまづかへすらん  
人のもとにまかりてきぬへだてにふし  
てかえるとして申しかけける

19 へだてつるころもの関のかたければ

うらみてぞふる人の心を

X IV 『為忠家初度百首』 題 春

海路霞 為忠朝臣

20 うらづたふころもせきのなみのうへに

たちかさねたるやへがすみかな

X V 『為忠家後度百首』 題 雪十五首

氷上雪 加賀守顯広

21 ころもがはむすぶこほりのけぬがうへに

つもるゆきをやとちかさぬらん

氷上雪 兵庫頭仲正

22 とぢわたすこほりに雪のうはぎして

さむげにみゆるころもがはかな

X II 『金葉（きんよう）和歌集』 —「橋本公夏（はしもとぎんなん）筆本拾遺」、永長元年（1096）に出家した

白河法皇による第五代の勅撰集、650首、10巻、天治（てんじ）元年（1124）頃成立、撰者は源俊賴

\*源俊賴（みなもとのとしより） —次項参照のこと

\*覺雅（かくが）法師 —『久安百首』の作者の一人

X III 『散木奇歌集（さんぼく・きかしゅう）』 —源俊賴（みなもとのとしより）の自撰家集、天治元年（1124）の『金

葉集』 撰進後の大治（だいじ）三年（1128）頃成立

\*源俊賴 —天喜（てんぎ）三年（1055）生、大治四年（1129）没。左京權大夫、木工頭などを歴任、從四位上となる。『金葉集』の撰者

X IV 『為忠家初度百首（ためただけ・しよど・ひやくしゅ）』 —「丹後守家百首（たんごのかみけひやくしゅ）」とも、

丹後守藤原為忠（ふじわらのためただ）が主催した百首会、長承（ちようしやう）三年（1134）頃成立

\*藤原為忠 —？、保延（ほうえん）二年（1136）没。三河守・丹後守等の後に從四位に昇る。家集は『為忠朝臣集』

X V 『為忠家後度百首（ためただけ・こと・ひやくしゅ）』 —「丹後守藤原為忠が主催した百首会、保延元年（1135）頃成立

頃成立

\*加賀守顯広（あきひろ） —藤原俊成（ふじわらのしゅんぜい）、永久（えいきゅう）二年（1114）生、元久

（げんきゅう）元年（1204）没、初名の顯広を仁安（にんあん）二年（1167）に俊成に改名。左京大夫

兼皇太后宮大夫になり、正三位に昇る。『千載集（せんざいしゅう）』の撰者・家集『長秋詠藻（ちようしゅう・

えいそう）』、歌学書『古来風体抄（こらい・ふうていしやう）』

\*源仲正（みなもとのなかまさ） —？、保元元年（1156）没、五位で兵庫頭（ひようこのかみ）



X VI 『久安百首』 題 夏十首

待賢門院安芸

23 帰る春ころものせきやこえぬらん

けふよりなつに立帰るかな

X VII 『詞花和歌集』 第六 別

みちさだわすれてのち、みちのくにのか  
みにてくだりけるにつかはしける

24 もろともにたたましものをみちのくの

和泉式部

衣のせきをよそにきくかな

X VIII 『後葉和歌集』 卷第十一 恋

関白家信濃

25 よとともに袖のみぬれて衣川

こひこそわたれあふせなければ

X IX 『月詣和歌集』 卷第三 三月 羈旅歌

朝海法師

26 さみだれはみかさまさればころも河

ただでぞ旅の日数へにける

〃 卷第七 七月 雑上

関路霞といふことをよめる 伊余法師

27 みちのくの衣の関をきてみれば

春は霞ぞ立ちへだてける

X VI 『久安百首（きゆうあんひやくしゆ）』——『崇徳院御百首（すとくいん・おんひやくしゆ）』とも、『詞花集（かしゅう）』の撰集資料として編まれた歌集、崇徳院の命で久安六年（1150）に成立

\*待賢門院安芸（たいけんもんいん・あき）——生没年不詳、待賢門院の女房であった女流歌人

X VII 『詞花和歌集（しか・わかしゅう）』——詞花集（しかしゅう）・詞華（しか）和歌集とも、崇徳上皇の命による第六代勅撰集、420首、10巻、撰者は藤原顕輔（ふじわらのあきすけ）、仁平（にんびょう）元年（1151）奏覧

\*和泉式部（いずみ・しきぶ）——生没年不詳、女流歌人、大江雅致（おおえのまさむね）の女、和泉守橘道貞（たちばなのみちさだ）の妻、『和泉式部集』『和泉式部日記』など。この歌は『金葉和歌集』『和泉式部集』にも見える

\*橘道貞——1016、藤原道長の側近で、和泉守・陸奥守を歴任

X VIII 『後葉（ごよう）和歌集』——久寿（きゅうじゆ）二年（保元（ほうげん）元年（1155）頃成立、撰者は藤原為経（ふじわらのためつね）

\*藤原為経——1113頃～1183頃、出家して寂照法師（じゃくしょう・ほうし）

X IX 『月詣（つきもつで）和歌集』——「寿永百首（じゅえい・ひやくしゆ）家集」「兼実家百首（かねざねけ・ひやくしゆ）」「久安百首」、重保主催の歌合ほかを資料とした私撰集、寿永元年（1182）成立、撰者は賀茂重保（か

ものしげやす）

\*賀茂重保——1119～91、賀茂神社の神主で歌人、寂然（じゃくぜん）に依頼し「寿永百首」を編ませる

\*朝海法師

\*伊余法師



XX『山家集』 下 雑

十月十二日、ひらいつみにまかりつきたりけるに、ゆきふり、あらしはげしく、ことのほかあれたりけり、いつしか衣河みまほしくて、まかりぬかひてみけり、

かはのきしにつきて、衣河の城しまはしたる、ことがらやうかはりてものをみるこちしけり、

みぎはこほりてとりわきさええければ

28 とりわきて心もしみてさえぞわたる

衣河みにきたるけふしも

羈旅歌

29 涙をば衣川にぞ流しつる

ふるき都をおもひ出でつつ

XXI『隆信集』 恋三

寄河恋

30 はるかなるほどとぞきし衣川

かたしく袖のなにこそ有りけれ

XXII『新古今和歌集』巻第九 離別歌

だいしらず 源重之

31 衣河みなれし人の別には

袂までこそ浪は立ちけれ

XX『山家集』(さんかしゅう)——西行の家集、約1600首、編者・成立年未詳、西行の歌を集めたものに、『西行上人集』『山家心中集』(さんか・しんじゅうしゅう)などがある

\*西行(さいぎょう)——元永(げんえい)元年(けんきゅう)元年(1118)90、俗名佐藤義清(さとう・のりきよ)、北面の武士として鳥羽上皇に仕えたが、23歳で出家、諸国を行脚。『新古今集』の代表的歌人の一人、家集『山家集』などがある。

西行は平泉(衣川)を二度訪れているが、初度は30歳前後の久安(きゅうあん)四年(1148)頃で、能因法師の跡を追った旅。再度訪問は70歳の文治(ぶんじ)二年(1186)で、重源(ちゅうげん、1121-1206)の依頼に応じて、東大寺再建のための寄附を藤原秀衡に依頼するための旅。西行と秀衡が佐藤氏として同族であるという認識は当時から存在していた

▲29の詞書「奈良の僧、とがのことによりて、あまた陸奥国へ遣はされしに、中尊寺と申す所にまかりあひて、都の物語すれば涙ながす、いとあはれなり、かかることはかたきことなり、命あらば物がたりにませむと申して、遠国述懐と申すことをよみ侍りしに」

XXI『隆信集』(たかのぶしゅう)——元久(げんきゅう)元年(1204)頃成立か

\*藤原隆信(ふじわらのたかのぶ)——康治(こうじ)元年(けんきゅう)二年(1142-1205)、正四位下(しょうしいげ)右京権大夫(うきょう・ごんのだいぶ)、『新古今集』撰進の際の和歌所寄人(わかどころ・よりうど)、家集には『寿永百首家集』(じゅえい・ひやくしゅう・かしゅう)など、この歌は『六百番歌合』にも見える

XXII『新古今和歌集』(しん・こきん・わかしゅう)——後鳥羽上皇による第八代の勅撰集、2000余首、20巻、元久(げんきゅう)二年(1205)成立、撰者は藤原定家(ふじわらのていか)・寂蓮(じゃくれん)ほか

\*源重之(みなもとのしげゆき)——長保(ちやうほ)三年(1001)頃没、三十六歌仙の一人、家集『重之集』、奥州に土着した源兼信(かねのぶ)の子で、晩年を奥州で過ごし没した

XXIII『明日香井和歌集 雅経』上 院百首

建保四年春日同詠百首應製和歌

夏 正四位下行右近衛權中將兼伊予介藤原朝臣

32 あづまじの衣のせきの名もつらし

けさたちかふるはるのわかれに

〃

下

隔関恋

33 あづまじのころもの関をうちこえて

その名を君とかさねつるかな

XXIV『洞院撰政家百首』上 于時関白左大臣

題 冬、

正三位知家

34 衣川いく夜かさねて氷るらん

玉藻に波の跡は見えつつ

XXV『壬二集 家隆』

文治百首号閑居百首 百首文治三年十一月

春二十首

35 衣河今朝たちわたる春風に

とどしこほりも解けやしぬらん

XXVI『新勅撰和歌集』第十一 恋歌一

左京大夫顕輔家歌合に

法性寺入道前関白家参河

36 ひとしれずねをのみなれば衣河

そでのしがらみせかぬ日ぞなき

XXIII『明日香井和歌集 雅経（あすかい・わかしゅう、まさつね）』—藤原雅経の家集、承久三年（1221）以前

\*藤原雅経（ふじわらのまさつね）—嘉応（かおう）二年、承久（じょうきゅう）三年（1221）、参議（さんぎ）

従三位（じゅさんみ）右兵衛督（うひょうえのかみ）、伊予介（いよのしけ）などになる、『新古今集』撰者の一人、

飛鳥井（あすかい）雅経とも

XXIV『洞院撰政家百首（とういん・せつしょうけ・ひやくしゅ）』—洞院撰政藤原教実（ふじわらののりざね）主

催の百首歌、貞永（じょうえい）元年（1232）成立、藤原教実（1211～1235）は九条（くじょう）

教実とも

\*藤原知家（ふじわらのともいえ）—寿永（じゅえい）元年、正嘉（しょうか）二年（1182～1258）、承

久（じょうきゅう）元年（1219）正三位となる、暦仁（りやくにん）元年出家

XXV『壬二集 家隆（みにしゅう かりゅう）』—『玉吟集（ぎよくぎんしゅう）』とも、藤原家隆（ふじわらの

いえたか）の他撰歌集、1237～45年頃成立

\*藤原家隆—保元（ほうげん）三年、嘉禎（かてい）三年（1158～1237）、壬生二品（みぶ・にほん）と

称された、『新古今集』撰者の一人、「今朝」は「袈裟」か

XXVI『新勅撰和歌集（しん・ちよくせん・わかしゅう）』—後堀河天皇（在位1221～32）による第九代の勅

撰集、1380余首、文暦（ぶんりやく）二年（1235）成立、撰者は藤原定家（ふじわらのさだいえ・ていか、

1162～1241）

\*藤原顕輔（1090～1155）

\*法性寺入道（ほつしょうじ・にゅうどう）前関白家参河（さきのかんぱくけ・みかわ）—藤原忠通（ふじわら

のただみち）のこと、承德（じょうとく）元年、長寛（ちようかん）二年（1097～1164）、保安（ほう

あん）三年（1122）従一位になる、大治（だいじ）三年（1128）太政大臣になり、翌年関白になる

X・XVII『宝治百首』題 秋廿首

関霧 有教

37 みちのくの衣の関をきてみれば

立つ朝霧ぞはるる間もなき

〃 寄関恋 家良

38 ひとめもる衣のせきのせきかねて

とまらぬ物は涙なりけり

〃 寄関恋 師繼

39 逢いみても猶や恨みん身にちかき

衣の関のへだてばかりに

X・XVIII『統後撰和歌集』巻第八 冬歌

建保六年歌合 冬関月 順徳院

40 かぜさゆる夜半の衣のせき守は

ねられぬままの月や見るらん

X・XIX『統拾遺和歌集』巻第九 羈旅歌

旅歌の中に 大蔵卿行宗

41 みやこ出てたちかへるべきほどとほみ

衣の関をけふぞ越えゆく

衣笠内大臣

42 たび人の衣の関のはるばると

都へだてていくひきぬらん

〃 『統拾遺和歌集』巻第十五 恋歌五

宝治百首歌たてまつりける時、寄関恋

前参議忠定

43 あとたえて人もかよはぬひとりねの

衣のせきをもるなみだかな

X・XVII『宝治百首』(ほうじひやくしゅ)―『宝治御百首』(ほうじ・おんひやくしゅ)とも、後嵯峨院(ごさがいん、

在位1242〜46)が『統後撰集』(しよく・ごせんしゅう)の撰歌資料として宝治二年(1248)に主要歌人40人に詠進させた百首

\*源有教(みなもとのありのり)―1192〜1254年、従二位(じゆにい)行兵部卿(こう・ひょうぶきょう)

\*藤原家良(ふじわらのいえよし)―建久(けんきゅう)三年(1192)文永(ぶんえい)元年(1192)1264、

仁治(にんじ)元年(1240)内大臣(ないだいじん・うちつおとど)、衣笠(きぬがさ)前(さきの)内

大臣と称す、『続古今和歌集』の撰者の一人

\*藤原師繼(ふじわらのもろつぐ)―貞応(じょうおう)元年(1222)弘安(こうあん)四年(1222)81、寛元

(かんげん)三年(1245)従三位に進み、参議権(ごんの)中納言、権大納言を経て、文永八年(1271)

内大臣となる、花山院(かざんいん)師繼とも

X・XVIII『統後撰和歌集』(しよく・ごせん・わかしゅう)―後嵯峨天皇(在位1242〜46)による第十代の勅

撰集、1370余首、20巻、建長(けんちょう)三年(1251)成立、撰者は藤原為家(ふじわらのためいえ、

1198〜1275、定家の子

\*順徳院(じゆんとくいん)―建久(けんきゅう)八年(1197)仁治(にんじ)三年(1197)1242、第84代天皇

承久の変(1221)で佐渡に流される、歌学書「八雲御抄(やくも・みしゅう)」などを著わした

X・XIX『統拾遺和歌集』(しよく・しゅうい・わかしゅう)―亀山上皇(1274〜87)による第十二代の勅撰集、

1460余首、20巻、弘安(こうあん)元年(1278)奏覧、撰者は藤原為氏(ふじわらのためうじ、為家の長男、

1222〜86)

\*源行宗(みなもとのゆきむね)―1164〜1144年、大蔵卿、従三位になる

\*衣笠内大臣―既出の藤原家良に同じ

\*前参議忠定―中山忠定(なかやま・たださだ、1188〜1256)、大納言中山(藤原)兼宗(かねむね)の

息、中宮権大夫(ちゅうぐう・ごんのだいぶ・左中将(さちゅうじょう)を経て参議となる

X X X 『新後撰和歌集』 卷第十三 恋歌三  
前参議教長家の歌合に 隔河恋

藤原親盛

44 いもがすむやどのこなたの衣河  
わたらぬをりも袖ぬらしけり

X X X I 『夫木和歌抄』 卷第四 題 花

五十首歌 前中納言定家卿

45 桜いろに四方の山風染めてけり

衣の関の春の明ぼの

洞院撰政家百首、花 大納言経通卿

46 花の香を行手にとめよ旅人の

ころもの関のはるの山風

光台院入道二品親王家五十首、開花

正三位知家卿

47 さくら色の衣の関のはる風に

わすれがたみの花の香ぞする

文永二年七月白川殿七百首、古来歌合

左近中将具氏卿

48 立ちかへり猶みてゆかんさくら花

ころものさとにほふ盛は

〃 『夫木和歌抄』 卷第七 夏部一 題卯花

為忠朝臣家三川国名所歌合、衣里 藤原忠隆

49 しろたへにさきかさなれるうの花は

衣の里のつまにぞ有りける

〃 『夫木和歌抄』 卷第八 夏部二 題 郭公

久安百首 前参議親隆卿

X X X 『新御撰和歌集(しん・ごせん・わかしゅう)』—後宇多(こうだ) 上皇(院政は1301~08)による第  
十三代の勅撰集、1610余首、20巻、嘉元(かげん) 元年(1303) 成立、撰者は二条為世

\*二条為世(にじょう・ためよ) —1250~1338年、為氏の長男、藤大納言とも

\*前参議教長—藤原教長(ふじわらののりなが)、1109~1180年頃

\*藤原親盛(ふじわらのちかもり) —?~1200頃、藤原親康(ちかやす)の子、家集は『親盛集(ちかもりしゅう)』

X X X I 『夫木和歌抄(ふぼく・わかしゅう)』—私撰類題和歌集、36巻、万葉集以後の家集・私撰集・歌合・百首

などから、従来の撰に漏れた17350余首の歌を集め、四季・雑に部立し、類題に細分したもの、夫木集とも、

撰者は藤原長清、延慶(えんぎょう) 三年(1310) 頃成立、夫木は「扶桑(ふそう)」の偏旁

\*藤原長清—生没年不詳、冷泉為相(れいぜい・ためすけ) より和歌を学ぶ

\*『五十首歌(ごじゅつしゅうた)』—後鳥羽院(ごとうはいん) が催した「老若五十首歌合(ろうにやく・ごじゅつ

しゅう・うたあわせ)」、後鳥羽院・定家・家隆など10人

\*前中納言定家(さきのちゅうなごん・ていか) —藤原定家(さだいえとも、1162~1241)、『新古今和歌集』

『新勅撰集』の撰者、家集は『拾遺愚草(しゅうい・ぐそう)』、京極殿・京極中納言とも

\*『洞院撰政家百首(とういんせつしゅうけ・ひやくしゅう)』—九条教実(くじょう・のりざね) が企画し、貞永

(じょうえい) 元年(1232) に成立、定家・家隆など

\*大納言経通知

\*『光台院入道二品親王家百首(こうだいいんにゅうどう・にほんしんのうけ・ひやくしゅう)』—道助(どうじよ

親王が嘉祿(かろく) 元年(1225) 四月に催した百首

\*正三位知家(しょうさんみ・ともいえ) —藤原知家(1182~1258)、大宮三位(おおみや・さんみ) 入

道

\*文永(ぶんえい) 二年(1265) 七月『白川(河) 殿七百首(しらかわどの・しちひやくしゅう)』—後嵯峨院

(ごさがいん) が文永二年七月七日に催した、藤原為家(ためいえ) ほか

\*左近衛中将具氏(さこんえのちゅうじょう・ともうじ) —源具氏(みなもとのともうじ、1231~75)、堀

川(ほりかわ) 具氏とも

\*『為忠朝臣家三川(河) 国名所歌合(ためただあそんけ・みかわのくに・めいしよ・うたあわせ)』—藤原為忠

が催した歌合、1125~31に成立したか

\*藤原忠隆(ふじわらのただたか) —1102~50年、従三位、大藏卿、信頼(のぶより) の父

50 ほととぎす衣のせきにたづねきて

きかぬうらみをかさねつるかな

// 『天木和歌抄』 卷第八 夏部二 題 螢

承久二年四季百首 従二位家隆卿

51 たが袖につつむほたるのころもがは

おもひあまりて玉とうくらん

// 『天木和歌抄』 卷第十七 冬部二 題 水鳥

永承五年十一月俊綱朝臣家歌合、水鳥

52 ころもがはつまなきをしのこゑ聞けば

まづわが袖のさえまさりける

// 『天木和歌抄』 同歌合、水鳥 読人不知

53 昨日たち今日来てみれば衣川

裾綻ひてさけあがるらむ

// 『天木和歌抄』 同歌合、水鳥 山縣内大臣

54 綻びし衣の館の跡と問へば

露けき袖に秋風ぞふく

// 『天木和歌抄』 同俊綱朝臣家歌合、水鳥

55 いろいろな替る昔も変はりなき

法の光をけふ見つるかな

// 『天木和歌抄』 卷第二十 雑部二 題 山

万代 藤原経衡

56 ほどちかくころもの里はなりぬらん

ふたむら山をこえてきつれば

\* 久安百首（きゅうあん・ひやくしゅ）——崇徳院の命で久安六年（1150）に成立、崇徳院・俊成ほか

\* 前参議親隆（さきのさんぎ・ちかたか）——藤原親隆（1099～1165）、

\* 『承久（じようきゅう）二年四季（題）百首（しき・だい・ひやくしゅ）——承久二年（1220）慈円（じえん）

の勅進による百首、大僧正四季百首？

\* 従二位家隆（じゆにい・いえたか）——藤原家隆（1158～1237）、従二位・宮内卿、『新古今集』の撰者の一人、

この歌は『玉吟集（ぎよくぎんしゅう）』にも見える

\* 『永承（えいしゅう）五年十一月俊綱朝臣家歌合（としつなあそんけ・うたあわせ）——永承（1050）、橘俊綱（た

ちばなのとしつな）が催した歌合、この歌は『玉吟集』にもある

\* 山縣内大臣

\* 中尊寺行誠

\* 藤原経衡（ふじわらのつねひら）——1006～72年、家集は『経衡集』

〃『夫木和歌抄』 卷第廿一 雑部三 題 関

ころものせき、陸奥

嘉応二年十月法住寺殿歌合、

関路落葉 土御門内大臣

57 ちりかかるとみぢのにしきうはぎにて

衣のせきをすぐるたび人

衣がはのせきのをさのおいしけるを

みて 重之

58 昔みしせきもりみればおいにけり

年のゆくをばえやはとどめぬ

家集 近衛院因幡、光信女

59 もみぢちる衣の関をきてみれば

ただかたつまをそむるなりけり

〃『夫木和歌抄』 卷第廿四 雑部六 題 河

衣川、陸奥 松近河といふ事を

西行上人

60 衣河汀によりて立つなみは

きしのまつがねあらふなりけり

〃『夫木和歌抄』 卷第廿八 雑歌十 題 小小妻

十題百首 寂蓮法師

61 山がつのむすびてかづくささめこそ

ころものせきと雨をとほさね

\*『嘉応（かおう）二年十月法住寺殿歌合（ほうじゅうじどの・うたあわせ）——嘉応二年（1170）に建春門院（けんしゅん・もんいん）の主催で、法住寺殿（後白河院の御所）で開催された歌合

\*土御門（つちみかど）内大臣—源通親（みなもとのみちちか、1149～1202）、久我（こが）通親とも

\*源重之（みなもとのしげゆき）——？～1000年頃、藤原実方（ふじわらのさねかた）に従って陸奥へ下向し、没したという、家集『重之集（しげゆきしゅう）』

\*近衛院因幡（このえいん・いなば）

\*西行上人（さいぎょう・しょうにん）——1118～90年、俗名佐藤義清（さとう・のりきよ）、円位（えんい）上人、家集『山家集（さんかしゅう）』

\*60の歌は『雙林寺（京都東山）にて、松汀に近しといふことを人々よみけるに』の詞書がある

\*小小妻（ささめ）

\*寂蓮（じゃくれん）法師—藤原定長（ふじわらのさだなが、1139?～1202）、家集『寂蓮法師集』



〃『夫木和歌抄』巻第卅一 雑部十三 題里

ころものさと 陸奥 六帖題御歌

こうばい 中務卿みこ

62 わぎもこが衣の里の梅のはな

さぞくれなるの色にさくらん

里、現存六 鷹司院按察

63 いまよりはかすみもさこそ立ちぬらめ

衣のさとに春しきぬれば

為忠朝臣家三川国名所歌合、衣里

平為盛

64 夜をかさねみやま立出でてほととぎす

衣のさとにきつつなくなり

同 意尊法師

65 春過ぎて夏のひとへになりながら

衣のさととは名こそかはらね

XXXII『続千載和歌集』巻第八 羈旅歌

嘉元百首歌奉りし時 贈従三位為子

66 ゆく人もえぞ過ぎやらぬ吹きかへす

ころもの関の今朝の嵐に

XXXIII『続後拾遺和歌集』巻第十六雑歌中

ぬす人にあへりける又の日、人のもと

よりきぬをおくりて侍りければ

清原元輔

67 浅からず思ひそめてし衣がは

かかるせにこそ袖もぬれけれ

\*六帖題御歌（ろくじようだい・おんうた）―寛元（かんげん）二年（1243）頃成立、藤原家良（ふじわらのいえよし）など

\*中務卿（ちゅうむきょう）みこ―生没年不詳、宇多天皇（うだてんのう）皇孫女、三十六歌仙の一人

\*鷹司院按察（たかつかさいんのあぜち）―生没年不詳

\*為忠朝臣家三川国名所歌合―既出

\*平為盛（たいらのためもり）―平頼盛（たいらのよりもり）の次男？

\*意尊（いそん）法師

XXXII『続千載（しよく・せんざい）和歌集』―後宇多（こうだ）法皇の命による第十五代の勅撰集、元応（げんおう）二年（1320）成立、2150余首、20巻、撰者は二条為世

\*二条為世（にじよう・ためよ）―1250～1338年、藤大納言（とう・だいなごん）とも

\*贈従三位為子（ぞうじゆさんみ・ためこ）―二条為子（にじよう・ためこ）、生没年不詳、後醍醐天皇の宮人、元於応二年従三位を追贈された

XXXIII『続後拾遺（しよく・ごしゆつい）和歌集』―後醍醐（ごだいご）天皇の命による第十六代の勅撰集、

1355余首、20巻、嘉暦（かりやく）元年（1326）成立、撰者は二条為世、没後孫の為定（ためさだ）、

1293～1360）が完成した

\*清原元輔（きよはらのもとすけ）―延喜（えんぎ）八年～正暦（しょうりやく）元年（908～990）、清少

納言（せいしようなごん）の父、寛和（かんわ）二年（986）肥後守となる、三十六歌仙の一人、『後撰集（ご

せんしゅう）』の撰者の一人、家集は『元輔集（もとすけしゅう）』



XXXIV 『拾玉集』 第五

反し（君ゆゑはあやしきつまのなたつと  
もうらみはあらじ墨染の袖） 幕下

68 墨染といふまでしりぬころもがは

きよき名ぞたつみちのくまでも

XXXV 『延文百首』 題 恋廿首

寄関愛

尊道

69 かへしてもあふとはみえぬ夢路にや

衣のせきの名には立つらん

XXXVI 『新千載和歌集』 巻第八 羈旅歌

嘉元百首歌たてまつりける時、旅、お

なじ心を

津守国助

70 旅ねする衣の関をもるものは

はるばるきぬるなみだなりけり

〃 『新千載和歌集』 巻第十八 雑歌下

よみ人しらず

71 そむきても世にすみぞめの衣河

かはるしるしのなき我が身かな

XXXIV 『拾玉集』（しゅづぎよくしゅう）——慈円の私家集、5巻、尊円（そんえん）親王（1298～1356）

と慶運（けいうん、？～1369頃）によつて貞和（じょうわ）二年（1346）に完成

\*幕下（ばつか）——將軍、その家来

\*慈円（じえん）——久寿（きゆうじゅ）二年～嘉祿（かろく）元年（1155～1225）、養和元年（1181）

慈円と改める、建久（けんきゅう）三年（1191）天台座主、建任（けんにん）三年（1203）大僧正、

家集は『拾玉集』、藤原忠通（ただみち）の子、著作『愚管抄（ぐかんしょう）』、勅諡号は慈鎮（じちん）

XXXV 『延文百首（えんぶんひゃくしゅ）』——『新千載集（しん・せんざいしゅう）』撰集の資料として後光厳（ご

こうごん）天皇（在位1352～71）により延文元年（1356）に、主な歌人33名に詠進させた百首

\*尊道（そんどう）——尊道入道親王（1331～1403）、座主宮

XXXVI 『新千載（しん・せんざい）和歌集』——後光厳天皇による第十八代の勅撰集、2365首、20巻、延文四

年（1359）成立、撰者は藤原為定

\*藤原為定（ふじわらのためさだ）——1293～1360年、二条（にじょう）為定とも

\*嘉元百首（かげん・ひゃくしゅ）——『新後撰（しん・ごせん）和歌集』の撰定に際して後宇多（ごうだ）上皇

が召した百首、1302～03年に詠進か

\*津守国助（つもり・くにすけ）——撰津住吉神社（せつつ・すみよしじんじや、大阪府）の神主で歌人、

1242～99年

## X X X VII 『新葉和歌集』 巻第五 秋歌下

だいしらず 前中納言為忠

72 霧むすぶ袖をころもの関ぢとや

空行く月も影とどむらん

## X X X VIII 『新続古今和歌集』

ともだちのあづまのかたへまかりける

が、かくともしらでまかりくだるにけれ

ばちぬてつかはしける 藤原顕綱朝臣

73 東路にたつ日をだにもしらせねば

衣の関のあるぞかひなき

## 〃 『新続古今和歌集』 巻第十一 恋歌一

題不知 寂照法師

74 みちのくの衣の関か人しれぬ

涙おさふるわれがたもとは

## X X X IX 『類聚歌合』 巻第十二

元永二年十月二日内大臣忠通家歌合

三十番 恋六番 信濃公

75 夜と共に袖のみ濡れて衣川

こひこそわたれ逢瀬なければ

X X X VII 『新葉（しんよう）和歌集』 — 長慶（ちようけい）天皇（在位1368〜83）による準勅撰和歌集

1420首、20首、弘和（こうわ）元年（1381）奏覧、南朝方の人々の歌、撰者は宗良（むねよし）親王（1311〜85頃）

\* 前中納言為忠（さきのちゅうなごん・ためただ） — 二条（にじょう）為忠（？〜1373頃）

X X X VIII 『新続古今（しん・しよく・こきん）和歌集』 — 後花園（ごはなぞの）天皇（在位1428〜64）によ

る第二十一代勅撰集、2144首、20巻、永享（えいきよう）十一年（1439）成立、撰者は飛鳥井雅世

\* 飛鳥井雅世（あすかい・まさよ、1390〜1452）、公卿で歌人、飛鳥井雅縁（まさより）の子

\* 藤原顕綱（ふじわらのあきつな） — 長元（ちようげん）二年〜康和五年（1029〜1102）、歌人、讃岐・丹後・和泉・但馬等の地方官を歴任、家集に『顕綱朝臣下集（あきつな・あそんしゅう）』

\* 寂照（じやくしやう）法師 — 大江定基（おおえのさだもと、962?〜1034）

X X X IX 『類聚歌合（るいじゅう・うたあわせ）』 — 歌合を主催者の身文別に類別集成した。1068年前後の「十

巻本（じっかん・ぼん）」と、1127年の「廿巻本（にじっかん・ぼん）」の2回編まれる

\* 元永（げんえい）二年（1119）十月二日に内大臣忠通家で行われた歌合

\* 藤原忠通（ふじわらのただみち） — 1097〜1164年、法性寺（ほつしょうじ）関白とも、忠実（ただざね）

の子で、兼実（かねざね）・慈円などの父

\* 信濃公（しなのこう） — 藤原忠平（ふじわらのただひら、880〜949）、基経（もとつね）の四男、天曆（てんりやく）三年（949）八月十四日70歳で死去、同十八日に贈正一位、信濃国に封じ、貞信公と諡す

XXX『古今著聞集』 卷第九 武勇

76 年をへし糸のみだれのくるしさに

衣のたてはほころびにけり

(衣河の館、岸高く川ありければ、楯をいだきて甲にかさね、筏をくみて責戦に、貞任等たへずして、つゐに城の後よりのがれおちけるを、一男八幡太郎義家、衣河においてせめふせて、「きたなくも、うしろをば見する哉。しばし引かへせ、物いはん」といはれたりければ、貞任見歸たりけるに、

衣のたてはほころびにけり

といへりけり。貞任くつばみをやすらへ、しころをふりむけて、

年をはし糸のみだれのくるしさに

と付けたりけり。其時義家、はげたる矢をさしはずして歸にけり。さばかりのたたかひの中に、やさしかりける事哉。)

XX松屋本『山家集』

西行

77 おさうれど涙でさらにとどまらぬ

衣の関にあらぬ袂は

XXX『古今著聞集』(ここん・ちよもんじゅつ)―鎌倉時代の説話集、建長(けんちょう)六年(1254)成

立、撰者は橘成季、「今昔(こんじゃく)物語集」「宇治拾遺(うじしゅうい)物語」「江談抄(こうだんしょう)」「十訓抄(じっくんしょう)」などの説話を取り入れ、日本の説話を題材別に分類収録したもの

\*橘成季(たちばなのなりすえ)―生没年不詳、橘光季(みつすえ)の養子、伊賀守となる、散木土(さんぼくし)・朝散大夫(しょうさん・たいふ)と自称した

\*この説話は延慶本(えんきようほん)『平家物語(へいけ・ものがたり)』、『源威集(げんいしゅう)』にも採られており、また、謡曲「貞任(さだとう)」も同様である。読み本系の延慶本『平家物語』は延慶二三年(1309)頃成立とされる。『源威集』は嘉慶(かきよう)年間(1387)成立と推定され、作者には結城直光(ゆうき・なおみつ、1330)説・佐竹師義(さたけ・もろよし、生没年不詳)説がある

XX松屋本(まつやほん)『山家集』―『山家集』の写本の一、近世の国学者小山田(おやまだ)與清(ともきよ、号松屋、

1783)による

## XXXI 『廻国雑記』

道興准后

78 陸奥の衣の関を来てみれば

霞みも幾重たち重ねけん

## 参考『枕草子』第五十二段 関は

「相坂の関・須磨の関・くきたの関・白河の関・衣の関・ただごへの関・憚りの関とたとしへなくお覚ゆれ。」

横走の関・清見が関・見るめが関・よしなよしの関こそいかに思ひ返したるならんと、いとしらまほしあれ云々」

XXXI 『廻国雑記（かいこく・ざつき）』—道興准后（どうこう・じゅこう、1430～1527）、文明十八

年（1486）六月～十月まで、越後・関東・甲斐、そして奥州松島を巡った旅の紀行文、准后は准三后（じゅさんぐう）とも

## 参考『枕草子（まくらのそうし）』—清少納言の随筆、最終成立は長保（ちようほう）二年（1000）以後か

\*清少納言（せいしょうなごん）—生没年不詳、清は本姓清原の略、少納言は宮中での呼称、清原元輔（きよは

らのもとすけ）の女（むすめ）、中古三十六歌仙の一人、家集『清少納言集』

\*相坂（逢坂、おうさか）の関—山城と近江、大津市

\*須磨（すま）の関—摂津と播磨、神戸市須磨区

\*くきた（岫田）の関—伊勢と大和、三重県旧一志郡

\*白河（しらかわ）の関—陸奥、福島県白河市

\*衣の関—陸奥、岩手県

\*ただごへの関—未詳

\*憚（はばか）りの関—陸奥、宮城県白石市

\*横走（よこはしり）の関、静岡県御殿場市～小山町

\*清見（きよみ）が関—静岡県静岡市

\*見るめが関—近江

\*よしなよしの関—陸奥、勿来関、福島県いわき市